The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	複合動詞後項型の卑罵語の歴史的変化についての研究
Author(s)	西谷, 龍二
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/101575
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　西谷　龍二　）	
論文題名	複合動詞後項型の卑罵語の歴史的変化についての研究

論文内容の要旨

本論文では、従来、歴史的変化に関する記述が、ほとんど行われていなかった卑罵語について、その歴史的変化の一端を明らかにすることを目的とする。特に本論文では、動詞連用形に接続するV＋ヤガルや、大阪方言に見られるV＋ヨル・クサルなどの卑罵語の形式群を「複合動詞後項型の卑罵語」と呼び、その歴史的変化を取り上げた。

(1)　a．お前は、いつも酒ばかり飲みヤガル。／b．最近は、雨がよく降りヤガル。

(2)　a．*お前は、酒ばかり飲みヨルな。／あいつは、酒ばっかり飲みヨルな。

(3)　いいかげんに黙りヤガレ・クサレ。／*いいにかげんに黙りヨレ。

(4)　大名とにかくに、くらハじなひ物をたべおつて、某によひほねをおらせた、あちへうせおれ太郎冠者かしこまつた

（「大蔵虎明本狂言」文蔵）

ヤガルなどの複合動詞後項型の卑罵語は、「主語を見下げる・下位に位置づける」といった用法が従来指摘されてきた。（1a）は、話者が主語である「お前」を見下げていると考えられる。しかし、（1b）のように非情物に対する使用例もあり、主語を見下げているとは言いにくい例も見られる。近年、（1b）は、話者の事態に対する悪感情・否定的評価を示すものと指摘され、主語を見下げる用法から派生したという考えも示されている。また現代大阪方言のヨルは、他の複合動詞後項型の卑罵語と異なり、二人称を主語とすることができないことや、命令形がなく、聞き手に対して行為の遂行を要求する（以下、このような表現を「行為指示表現」とする）ことができないとされてきた〔→（2・3）〕。しかし、歴史的につながりがある上方において、中世末期に卑罵語として使用され始めるヨルの前形であるオルは、(4) のように、二人称にも使用例が見られ、命令形で聞き手に行為の遂行を求めることも可能であった。このような差異から現代大阪方言のヨルの特徴は歴史的な変化によって生じていると想定される。しかし、従来、卑罵語については、その歴史的変化を対象とする研究がほとんど行われておらず、以上の問題についても、断片的にしか述べられてこなかった。具体的な変化の様相や要因などは不明なことが多い。そこで、本論文では、このような問題意識の上で、以下の問題設定を行い、複合動詞後項型の卑罵語の歴史的変化を明らかにすることを試みた。

①　複合動詞後項型の卑罵語には、歴史的にどのような変化が見られるのか。特に主語を見下げる機能から、話者の事態に対する悪感情・否定的評価を表す機能の派生が見られるのか。

②　卑罵語の歴史的変化には、何らかの共通する変化が見られるのか。

③　大阪方言のヨルには、三人称に使用が限定されることや、命令形が存在しないという特徴が見られるが、卑語化した時期の中世末期には見られない。現代大阪方言に見られるこのようなオル・ヨルの特徴がいつから見られるのか、またどのような過程を経て形成されるのか。

このような問いに先立ち、第1章では、従来、論者によって定義などが一致しない「卑罵語」について、概念整理を行い、特に先行研究で差異がある点を中心に、本論文の立場・定義を示した。

第2章から第5章では、上記の①②を考えるべく、個々の形式の歴史的な記述を通して、個別的な変化を扱い、共通点が見られるかを考えた。

第2章では、卑罵語アガル・ヤガルについて、近世期から明治大正期までの江戸語・共通語資料を対象に調査を行い、主語を見下げる用法から、話者の事態に対する悪感情・否定的評価を示す用法が派生するという仮説を検証した。近世前期・近世後期には意志的な動詞が多く、主語は有情物のみに限られる。しかし、近代以降、「いる」などの状態動詞に接続する例や、「雨が降りヤガル」といった非情物の例が出現することがわかった。以上から、事態に対する悪感情・否定的評価を示す用法は、近代以降に見られることを指摘し、主語を見下げる用法から事態に対する悪感情・否定的評価を示す変化が生じていることを実証した。

第3章では、中世末期から戦前までの上方語・大阪方言のオル・ヨルについて、前接動詞と主語の有生性に着目して、歴史的な調査を行った。中世末期・近世前期において、前接動詞は意志動詞が中心だが、近世後期に入ると無意志動詞のバリエーションが増え、近代以降、それまで見られなかった状態動詞（「いる・できる」）に接続する例が見ら

れた。また主語の有生性の調査から、中世末期から近世後期までは、有情物主語が大半であり、非情物主語の例は、近世後期までは稀だった。しかし、近代以降になると非情物主語の例が複数出現することがわかった。このようなことから、オル・ヨルも、話者の事態に対する否定的評価を示す用法がヤガル同様、近代以降派生したと述べた。

付章では、第2章・第3章で除いたヴォイス形式・テ形補助動詞に接続するオル・ヨル、アガル・ヤガルの例について、主語の有生性と前接動詞の意志性について観察した。ヴォイス形式の特徴では、「（サ）セル」に比べ、「（ラ）レル」例が少なく、特に、「（サ）セル」には無意志動詞、マイナス価値を持つものが多い。テ形補助動詞は、全体的に意志動詞が多く見られた。なお、オル・ヨルは「テクル」、アガル・ヤガルは「テイル」に接続する例といった違いが見られた。主語の有生性を見ると、オル・ヨルは、幕末期に非情物主語の例がヴォイス形式・テ形補助動詞に1例ずつ見られるが、その後の展開への影響は小さいと考えた。一方、アガル・ヤガルは、第2章の非情物主語の初出例よりも約30年早く出現しており、何らかの影響を与えている可能性が高いと解釈した。また、使役の「（サ）セル」に無意志動詞が多く見られる理由を、「強制」を表す使役が、本人が望んでいない事象を使役者によって達成させられてしまうことから生じる怒りなどの感情が合致するためと解釈した。

第5章は、複合動詞後項型の卑罵語「オル・ヨル、アガル・ヤガル、クサル」の主語の有生性を対象に、卑語化以前と卑語化以降を合わせて調査を行った。いずれの形式も、卑語化以前には、非情物主語を主語とする例が出現するが、卑語化が生じると主語が有情物に限定されることを明らかにした。また卑語化後に非情物主語に使用が拡大することは見られるが、有情物、または非情物に縮小する変化は見られない。これを踏まえ、出雲方言の複合動詞後項型の卑罵語であるサガルについても、同じような変化を辿った可能性が高いという見解を述べた。

第2章から第5章までの検討により、複合動詞後項型の卑罵語は、卑語化する際、主語が有情物に制限される変化が生じ、その後、歴史的に機能を拡張させ、事態に対する話者の評価を表すようになる変化が見られることが明らかとなった。ただ、後者の変化は、必ず生じるものではなく、あくまでそのような傾向が見られるというものである。

次の第6章から第8章では、現代大阪方言のヨルについて、中世末期から近代における使用実態をもとに、その特徴の形成過程を探るとともに、近代大阪方言資料の1つである上方落語の資料性についても検討を行った。

第6章では、中世末期から明治大正までの上方語・大阪方言のオル・ヨルについて、中世末期には、行為指示表現として使用されていたが、時代が下るにつれ用いられなくなる過程を観察した。中世末期から近世後期までは、命令形や意志推量形によって、行為指示表現として、オル・ヨルが用いられていたが、近代に入るとそのような使用が出現しないことを指摘した。それに伴い、意志推量形の衰退の背景を考察した。また、ヨルと同じように、社会的関係と話者個人の主観的評価が融合しているとされる関西方言の「ハル敬語」との類似性を述べた。

第7章は、中世末期から戦前までのオル・ヨルの主語の人称に注目して調査を行った。オル・ヨルは、中世末期・近世前期には二人称にも多くの使用例が見られるが、近世後期頃から三人称に使用が偏り、近代以降大きく偏る変化が見られた。ただし、近代以降でも二人称を主語とする使用が出現することを確認した。この他、従来ほとんど指摘されてこなかった一人称を主語とする例を確認し、近世期の使用の多くにアスペクトの性質が認められることを述べた。また使用が見られるその他の複合動詞後項型の卑罵語も調査を行い、上記の変化が、オル・ヨルにのみ見られることを確認した。このような人称の変化から、従来指摘が行われてきた「人称制約」が「二人称にも使用できるが、使用の多くが三人称に見られる」という現象を指すと解釈した。ただし、同じ二人称への使用であっても、近代以降とそれ以前では、その性質が変化していると主張した。また、この人称の変化によって、関西方言に特徴的な第三者待遇の体系が形成されるようになったと述べた。

第8章では、第7章の調査を踏まえ、近代大阪方言の資料としての上方落語の性質を考えた。近代以降、使用がほとんど出現しない一人称を主語とするオル・ヨルが、上方落語に複数見られることから、上方落語に見られる一人称を主語とするオル・ヨルの特徴を明らかにした。調査の結果から上方落語に見られる、一人称のオル・ヨルは、武士や田舎者といった特定の人物に対して使用されており。他の言語要素とともに田舎者や、武士などを特徴づける「役割語」の一要素として機能していると位置づけた。また「裁判・取り調べ」といった特定の場面で、使用が見られることから、特定の場面が形式を選択している可能性を述べた。このような具体的な使用例の検討を通して、上方落語の人工的な部分の一端を明らかにした。

第6章・第7章における記述により、他の複合動詞後項型の卑罵語には見られず、現代大阪方言のヨルだけに見られるとされてきた特徴が、歴史的な変化によって、形成されたものであることがわかった。本論文で述べたオル・ヨルの変化を、現代大阪方言のヨルの研究に持ち込むことで、さらなる議論が可能になると考えられる。本論文の試みによって、現代大阪方言におけるヨルの研究成果と、日本語史研究で断片的に述べられてきたオル・ヨルの研究成果を、一部ではあるが、橋渡しすることができたものといえよう。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（ 西谷龍二 ）	
論文審査担当者	（職）　　氏　名 主 査　大阪大学　准教授　　北﨑勇帆 副 査　大阪大学　教授　　岡島昭浩 副 査　大阪大学　教授　　岸本恵実

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式 7 別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：複合動詞後項型の卑罵語の歴史的変化についての研究

学位申請者　西谷龍二

論文審査担当者

主査　大阪大学准教授　北﨑勇帆

副査　大阪大学教授　岡島昭浩

副査　大阪大学教授　岸本恵実

【論文内容の要旨】

本申請論文は、日本語における「やがる」「よる」「くさる」のように、主語に対する「見下げ」（e. g. 「あいつ、また怒られよるわ」）や、生じた事態に対する「悪感情」（e. g. 「うわ、雨が降ってきやがった」）を表す「卑罵語」を対象に、その歴史的な変化を調査・分析するものである。同じ待遇表現の範疇であっても、「敬語」の歴史的研究が豊富であるのに対し、卑罵語はその社会的価値の低さにも起因して、研究の対象として扱われにくかった。申請者はこうした問題意識のもと、個別の卑罵語の歴史的変化と、複数の卑罵語に共通して見られる変化の傾向・方向性を、室町期以降の日本語資料からの丹念な用例収集に基づいて、実証的に論じている。

本論文は序章・終章を除いて 8 章から成る。第 1 章「複合動詞後項型の卑罵語の概念整理」では、曖昧な術語である「卑罵語」の先行論の整理・検討を行い、本研究の枠組みを設定する。第 2 章「ヤガル（アガル）の用法拡張について」では、先行論の「「主語下位待遇」から「事態に対する悪感情」へ」という仮説を批判的に検討し、「やがる」において、①この仮説が、歴史的資料からも実証可能であること、②この変化は、当初は「やがる」が有情物主語と意志性のある動作にのみ用いられていたところ、近世後期になって、その範囲を非情物主語・無意志動詞へと拡張することに端を発しているということ、の 2 点を明らかにする。第 3 章「上方語・大阪方言のオル・ヨルの前接動詞・主語の有生性について」でも同様の手続きに基づき、「おる・よる」が「やがる」と同様に「有情物主語・意志動詞」という制約を失っていくことを示す。附章（第 4 章）「ヴォイス形式・テ形補助動詞の使用状況について」は、第 2, 3 章で一旦調査から除いた形態群を補足的に扱っている。第 5 章「卑罵語の変化に見られる共通性について」は、第 2-4 章の類型化にあたる章であり、「くさる」を新たな分析対象に加えつつ、卑罵語には、①卑語化以前には主語の有生性に関する制約がないが、卑語化すると主語が有情物へと限定されること、②近代以降に非情物主語への拡張が起こること、③その後、有情物・非情物主語のどちらかに「縮小」するような制約は発生しないこと、という 3 点の共通する傾向が看取されるという類型化を行う。

卑罵語の変化にこうした共通性が存する一方で、「おる・よる」は、現代京阪方言では「主語を三人称とする」という、他の卑罵語が持たない「人称制約」の性質を有することが指摘されている。第 6 章以降はこの問題を中心に分析するものであり、第 6 章「行為指示表現から見た上方語・大阪方言のオル・ヨル」は、「おる・よる」の行為指示用法の有無に注目し、①成立期の中世後期には「失せおれ」のように行為指示（命令）に用いることが

できた一方で、近世後期になるとその例が減っていく（すなわち、行為指示用法が衰退していく）こと、②意志形による命令（e.g. 控えおろう）も、近世後期には一部の位相の話者に偏るようになること、の 2 点を明らかにし、こうした特徴が、現代大阪方言で「第三者待遇」を表す「はる」にも共通して見られることを指摘する。第 7 章「上方語・大阪方言におけるオル・ヨルの運用の変化―主語の人称の通時的状況について―」は、「おる・よる」が使用される人称の偏りに注目し、種々の卑罵語の中で「おる・よる」のみが、三人称主語の使用に偏っていくことを明らかにする。このことを踏まえつつ、先行論が「人称制約」と呼ぶものが、強い統語的制約ではなく、あくまで「三人称に偏る」という分布の問題に過ぎないことを指摘し、近畿方言に特徴的ないわゆる「第三者待遇」の使い分けが、この変化によって生じたものであるという仮説を提示する。第 8 章「上方落語に見られる一人称を主語とするオル・ヨルについて」は、近代上方落語資料の「おる・よる」に、一人称を主語とする（すなわち、前章までの調査の傾向には反する）例が見出されることを示し、これが、落語の言語のある種の「人工的」側面に起因することを指摘する。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、『論究日本近代語』（勉誠社）や『国語語彙史の研究』（和泉書院、掲載決定済）等に掲載された既発表論文 6 本と、口頭発表の予稿を中心に再構成したものである。先述したように、卑罵語は、有り体に言えば、その「野卑」であるというイメージから、特に、歴史的アプローチによる研究が立ち遅れており、申請者が解明したような問題も看過されてきた。しかし、言語形式の「社会的価値」が、研究上の意義を決定するものではないことは、言うまでもない。本論文の意義は大きく、①卑罵語に新たに光を当て、丹念な文献調査に基づき、現代語から演繹的に遡及するような「仮説」に留まらない、実証的なデータを提示したこと、②個別の「卑罵語」の史的変遷の記述のみならず、卑罵語が共通して持つ変化の傾向を指摘することで、言語変化一般の問題へと還元したこと、の 2 点にある。終章では、この「卑語化」の問題が、言語形式の「評価的意味の獲得」や「価値の低下・悪化」（pejoration）という変化類型とも関連性を持つことが展望として述べられており、この方向性でのさらなる深化も期待される。

本論文は、データの面では、卑罵語の成立の「前段階」と言える、中世後期の抄物資料の調査が不十分であり、また、論証の面では、上で示されたような変化が「なぜ」生じたかという、言語変化の「要因」の問題に踏み込めていない点も散見する。こうした点は、なお一層の調査・論証を要するが、研究史上の重要な論点を多く提示する、独創的な論考であることは言を俟たない。

よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。